

場の創造のプロセスからはじめる地域の拠点 Regional Center That Begins with the Process of Creating a Place

酒谷 粹将¹⁾, 藤原 真名美²⁾
Suisho Sakatani, Manami Fujiwara

- 1) 藤原酒谷設計事務所／関東学院大学 建築・環境学部 建築・環境学科, 専任講師, 博士(工学)
(〒236-8501 神奈川県横浜市金沢区六浦東 1-50-1 工学本館 402, sakatani@kanto-gakuin.ac.jp)
Fujiwara Sakatani Design Office / College of Architecture and Environmental Design, Kanto Gakuin University, Lecturer, Dr. Eng.
- 2) 藤原酒谷設計事務所／横浜国立大学大学院 Y-GSA, 設計助手, 修士(工学)
(〒236-0042 神奈川県横浜市金沢区釜利谷東 1-46-14 八景市場 101, fujiwara@fu-sa.com)
Fujiwara Sakatani Design Office / Yokohama Graduate School of Architecture, Design Assistant, M.Eng.

This paper discusses the nature of regional centers through an analysis of the "Hakkei Ichiba ANNEX" project. In particular, I will discuss the significance of considering regional centers from the perspective of the creative process of "thinking" and "creating", in terms of (1) the community of practice that creates regional centers, (2) objects in the creating process and human networks through objects, and (3) the creative confidence of local people.

地域拠点, 創造, プロセス, DIY, ワークショップ
Regional center, Creation, Process, Do-It-Yourself, Workshop

1. はじめに

2020年の年明け直後にコロナ禍の新しい生活様式へのシフトが余儀なくされてから、早くも1年以上の月日が流れた。長い自粛生活が強られる中、ワクチン接種の普及によって僅かな未来への光が見えつつあるものの、医療分野での喫緊の課題や経済面の社会の不安は膨らむ一方である。我々の身の回りの日常生活に目を向けてみてもその在り方は大きく変化してしまった。特に郊外に居を構える人々にとって、不要不急の目的で東京や横浜の都心部に向かうことは憚られ、自宅に籠りきりになっていた感染拡大の初期の状況に比べれば日常的な外出は多少出来るようにはなったものの、その範囲は最小限に留められている。結果として、ウィズ・コロナの時代においては自身のまちのローカルエリアでの暮らしの質をどう磨いていけるのか、そしてそのためにどのようにして地域の魅力を創出することができるのかをより深く考えなくてはならないようになったのではないだろうか。そしてその時には大規模な集会を伴わない、小さなスケールの人と人がつながれる場や居場所となる地域における拠点が重要な役割を担うことになるだろう。そしてそうしたローカールスケールの拠点がより地域に根づいた場となるためには拠点の空間や運営の仕組み等に配慮することはもちろんのことながら、その施設整備のプロセスの位置づけが重要な意味を持つものと考えられる。

本稿では以上のような問題意識のもとで2020年の9月から筆者らが関わる「八景市場 ANNEX」プロジェクトのこれまでの活動を振り返りながら地域の拠点のあるべき姿について考察を加えたい。

2. 八景市場 ANNEX プロジェクト

本プロジェクトのタイトルに含まれる「ANNEX」というのは「離れ」や「別館」等を意味する言葉であるが、その頭につく「八景市場」というのは京浜急行金沢文庫駅から徒歩10分の距離にある長屋形式の集合住宅である。(ちなみにその中の一室が筆者の自宅である。)筆者はこの「八景市場」の大家とこれまでに何度か地域でのイベント(例えばFig.1に示す、地域の小規模飲食店を集めて開催したマルシェイベント「ENJOY LOCAL! 八景市場」等)の企画・運営において協働することがあったのであるが、その際に偶然、大家が所有する空き家の利活用について相談を受けた。後日「八景市場」から徒歩2、3分のところにある空き家を訪ね、その場で学生シェアハウスと地域の拠点を兼ね備えた“まちのシェアハウス”



Fig.1 マルシェイベント「ENJOY LOCAL! 八景市場」



Fig. 2 対象とする空き家の外観

として活用することを提案したのであるが、これが「八景市場 ANNEX プロジェクト」の始まりであった。ファーストアイデアは単なる学生シェアハウスとしての空き家の活用であったが、かねてよりその大家が地域の活性化への強い関心を持っていたこともあり、学生シェアハウスでありながら、そのキッチンやリビング、庭といった共用部分をまちに開き、地域の人々ともシェアすることで誰もがその場所を居場所とできる地域活動の拠点として「八景市場 ANNEX」を整備することを目指すこととなったのである。

2020年の9月頃から、複数回に渡ってDIY解体ワークショップを開催し、この空き家の壁や床、天井などの解体作業を関東学院大学酒谷研究室の学生らを中心としたメンバーで行った (Fig.3)。2021年3月にはその提案方針に基づき、ひとまず最低限の居住環境を整えるための耐震補強と風呂やトイレ、キッチン等の水回りの整備工事を実施した。更に本プロジェクトやその整備方針、地域の中で今後どのようにこの場所が活用されてくのか、等について町内会や近隣の方々へと説明する機会を設けた (Fig.4)。そして4月からは学生3名が実際に八景市場

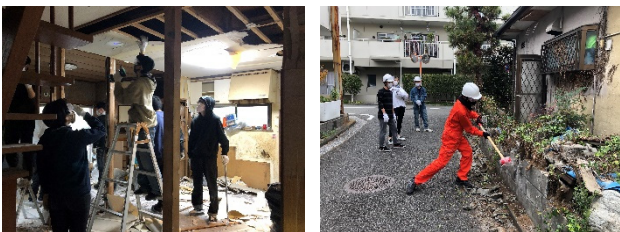


Fig. 3 DIY 解体ワークショップの風景



Fig. 4 町内会や近隣の方々への説明会

ANNEX での生活を始め、目標とする空間整備に対してその完成度合いは数%にも満たない状態ではあったが、横浜市金沢区の「空き家等を活用した地域の「茶の間」支援事業」のサポートも受けながら、ひとまず地域拠点の運用をスタートさせた。

3. 考える／つくるワークショップ

一連の解体ワークショップや耐震改修に並行してこの空き家を地域にひらくリノベーションの第二期工事の検討を進めており (Fig.5,6)、その目標に向かって学生らは暮らしながら少しずつ工事を進め、空間の整備を行っている。このようにこの場所での活動を本格的に始動した一方で、説明会等の機会を複数設けたもののいきなり施設の利用者が現れるわけではなく、突如として始まった八景市場 ANNEX の活動を近隣の人々に知ってもらい、地域に受け入れてもらうための試みも同時に進めていかなくてはならなかった。



Fig. 5 第二期工事の設計案 (模型)



Fig. 6 第二期工事の設計案 (パース・平面図)

このような意識のもとで、2021年4月から「八景市場 ANNEX をみんなで考えるワークショップ」と「八景市場 ANNEX をみんなでつくるワークショップ」と名付けた二つのワークショップをそれぞれ月に1度のペースで実施している。「考えるワークショップ」は地域の中で「八景市場 ANNEX」がどのような施設であるべきかを話し合う地域住民との対話の場である (Fig.7)。一方「つくるワークショップ」では耐震改修と水回りの工事だけが行われた隙間だらけの空間に対して、自分達でできる小さな改修工事を少しずつ進めている。(Fig.8)



Fig. 7 八景市場 ANNEX をみんなで考えるワークショップ



Fig. 8 八景市場 ANNEX をみんなで作るワークショップ

4. 考える／つくるプロセスが地域にもたらすもの

前述の通り、本プロジェクトは本格的な活動の開始からまだ1年も経っていない状況であるため、とても精緻な検証ができる段階にはない。しかしここではDIYの実際の作業からワークショップの企画・運営までの一連の活動に十全的に携わっている筆者らの立場から活動を振り返り、場を創造するプロセスから捉える地域の拠点の在り方を検討するための論点を仮説的に示しておきたい。完成した施設を地域に提供するという順序ではなく、「考える」「つくる」プロセスから地域の人々を巻き込み、拠点の整備を進めていくことに本プロジェクトの最も大きな特徴があると考え、以下の3つの観点からその意義について述べる。

4.1 創造の対象を地域で共有すること

「考える」や「つくる」といった言葉は目的語を必ず伴い、自ずと「〇〇を考える」「〇〇をつくる」という表現に行きつく。同様に地域の拠点を整備するプロセスにおいては、運営側だけでなくその利用者となる地域の人々の注目が、「考える」「つくる」対象となる拠点に必然的に集まることになる。その拠点の在り方が自身の暮らしに与える影響の大きな人にとってはなおさら大きな関心事となるだろう。本プロジェクトにおいても多くの応援の声と同時に「不特定多数の人の利用は治安上問題ないのか?」「騒音の問題があるのではないのか?」といった厳しいご指摘も受けているのも事実である。

一方でもとはこの地域の外に住んでいた“よそ者”であった学生らが、この地域に住み始めてから人々に受け入れられ、様々な日常の交流が生まれるまでにはそう時間はかからなかった。4月に居住をはじめてから「週末のラジオ体操へ参加する」「お隣さんへみかん(地域の別の方からのおすそ分け)のおすそ分けをする」「道路脇の草むしりの手伝いをする」「晩御飯のおかずを分けてもらう」といった、地域にはごくありふれた、しかし学生向けのワンルームマンションに住んでいたなら決して経験

することのなかったであろう出来事が、7月現在で既に頻発している。様々なご意見を頂き、丁寧にその対応や回答を重ねていくうちに地域の人々と会話する機会が増えたのは確かであり、そうした接触を繰り返したことが上記のような人と人のつながりの形成に寄与していると考えられるのではないだろうか。より良い拠点の整備を共通の目標として設定することが、そこに向かう人々の「実践共同体」¹⁾の形成に繋がるのである。特に市役所のような大きな公共施設をつくることに比べれば、小さな地域の拠点づくりには住民それぞれが自由に意見を言い合える気軽さのようなものもあり、関係主体がその実践に参入する障壁が低く、「考える」「つくる」プロセスから拠点のあり方を捉えることのメリットが相対的に大きいようにも思える。

4.2 モノを介した人のつながり

地域拠点が物理的な空間である以上、それを「考える」「つくる」プロセスにおいては数多くの“モノ”を扱うことになる。特に「つくる」プロセスにおいてそれは顕著であるが、こうしたモノを単なる制作の対象とみるのではなく、拠点整備に関わる“非人間”としてのモノ一つ一つの振る舞いに細やかに目を向けることも、人間同士のつながりを生むための重要な心がけのように思える。

3月に行った耐震改修に先立ち、空き家の壁や床、天井等の解体作業に加え、既存の風呂やトイレを始めとする水回り部分の撤去作業を予算の関係からDIYで行うことになった。多くの解体作業は石膏ボードや木材の破壊・撤去等であったが、基礎補強の工事のために、水回りの床を固めていたモルタルを削る必要があった。このとき硬いコンクリートでも破碎できる「電動ハンマー」を使用しなければならなかったのであるが、その作業には相当な騒音が発生することが予想されたため、ワークショップ当日の作業に入る前にプロジェクトチームのメンバーで近隣の住宅へ挨拶に伺うことにした。これまでも数ヶ月にわたって解体作業を進める中で簡単な会話を交わすことはあったが、この時に初めてその隣人とゆっくり話をする機会を得た。そして話を聞いてみるとどうも本プロジェクトのような学生たちの住まう寮のような空間の運営に強い関心を抱かれているようであったため、その後の活動の節々で様子を見に来てくれるようになり、ついには「今度カレーを一緒に作って食べましょう」といった約束を取り付けるにまで至った。こうしたひとつの局面だけを切り取るとほんのささいな出来事のようにも思えるが、この皆で一緒に食べるカレーは騒音の激しい電動ハンマーの機械が存在することなしには生まれなかったと言えるかもしれない。

上記のエピソードで見られるように目の前に存在するモノの振る舞いは、制作の主体である我々だけでなく、隣人を含むその他多くの人々に少なくない影響力をもつ。それが上述の“騒音”のような“迷惑”であることもしばしばであろう。そうしたモノと人との作用・反作用の

関係に目を向けるとき、「つくる」活動を起点とした人々のネットワーク形成の可能性が浮かび上がってくる。ブリュノ・ラトゥール²⁾をはじめとする多くの人類学者や社会学者が「アクターネットワーク理論」(actor network theory)の中で述べているように、世に存在するあらゆるものがアクターとなって互いに作用を与え合い、それらが織り成す複雑なネットワークで世界は構成されている。そのアクターには人間だけでなく多くの非人間としてのモノも含まれており、モノが持つ作用にも十分な注意を払いつつ、その可能性を最大限に活かすべきだろう。

こうした視点に立てば、例えば本プロジェクトで行っているようなDIYやDIWOの強みとして、つくることそのものから得られる喜び以上のものを指摘することができるのではないだろうか。つまりつくることを誰か他の人に依頼してブラックボックス化してしまうのではなく、そのプロセスをひらき、自らの手でつくる行為に取り組むことは数多くのモノとの出会いと交流に繋がることになる。そしてそのモノが多くの人々に様々な働きかけを行い、結果としてモノを介した人と人の繋がりの可能性を高めることになるだろう。

4.3 まちづくりに向ける勇気の拡がり

最後に地域の拠点で「考える」「つくる」活動が周辺に与える影響についても考察を加えたい。こうした一連の活動には何らかの情報発信が伴い、特に閑静な住宅街においてはそうした非日常の活動の姿は地域の人々の目につきやすいものである。例えば「八景市場 ANNEX をみんなで考えるワークショップ」においては、地域住民らとの対話の内容がニュースレターという形で毎回発行され、回覧板に乗って町内会を回っているし、「八景市場 ANNEX をみんなでつくるワークショップ」はDIYに勤しむワークショップの参加者の姿はもちろんのこと、日々刻々と変化する建物や庭の風景も少なくないインパクトを地域の人々に与えていることだろう。このように可視化された活動が“新しい何か”について「考える」「つくる」という創造的なものであることに重要な意味が含まれているのではないだろうか。どんな微細なことでも新しい何かを実現し、地域に小さな変化を繰り返し与える行為は“まちは自分達の手が変えることができるんだ”という地域の人々の創造性への自信を高めることにつながるように思えるのである。デザインコンサルタント会社のIDEOの代表であるデイヴィッド・ケリーとトム・ケリー³⁾はすべての人々には生まれ持った創造性があり、その創造性を発揮できるかどうかに関わる重要な要素として、自身の創造性に対する自信である「クリエイティブ・コンフィデンス」(creative confidence)を挙げている。よりよいまちをつくるためには強いマインドセットを持って継続的に活動を推し進めることのできるまちづくりの担い手が必要となるが、そうした活力溢れた人を地域の中から“見つけ出す”という発想の他に、直ぐ側にいる人々のクリエイティブ・コンフィデンスを引き

上げてより高い積極性を持った新たな主体を生み出す、という目標設定もまちづくりのひとつの戦略となるだろう。そのとき「八景市場 ANNEX」のような地域の拠点という場を創造する活動が人々のまちをつくる勇気に繋がっていると考えることができるのではないだろうか。事実、この「八景市場 ANNEX」を訪れた地域の方から自宅の空き室を「八景市場 ANNEX」でつくった料理をみんなで食べるスペースにできないか、という相談があったし、徒歩1分の距離にある廃幼稚園を子育てシェアスペースとして活用している「ルンビニーつながりの庭」における活動との連携・相乗効果はますます大きくなっている。そもそも「八景市場 ANNEX」の活動も前述の通り「ENJOY LOCAL!八景市場」という地域では初めてのマルシェイベントの試みに端を発するものであった。このように創造的な活動が徒歩5分圏内の小さな地域の中で連鎖しはじめていることは確かである。「考える」「つくる」という実践活動を目に見える形で発信し、創造性の輪を更に広げていくことを目指したい。

5. おわりに

本稿では「八景市場 ANNEX」プロジェクトについての紹介を行い、これまでの活動を振り返ることで地域における拠点のあり方について論じた。特に「考える」「つくる」といった創造のプロセスから地域の拠点を捉えることの意義について、①地域の拠点という場を創造しようとする実践共同体の形成、②つくるプロセスにおけるモノの存在とモノを介した人のネットワークの拡がり、③可視化される創造活動が醸成する地域の人々のクリエイティブ・コンフィデンス、といった観点から論じた。

本稿ではほとんど触れなかったが、こうした活動を经营的に可能にする前提として「八景市場 ANNEX」という地域の拠点が学生向けのシェアハウスと一体になっている点が挙げられる。シェアハウスによる一定の収益が確保されているからこそ創造のプロセスのための時間をたっぷり確保することができ、一方で“住まいながらつくる”ことの楽しみも暮らしの大きな価値になっている。拠点という機能を単体で、かつそれを民間が運営・維持することには多くの困難が伴うであろうが、異なる機能との上手い組み合わせで解決できる問題は多いのではないだろうか。そしてそこから生まれる建築プログラムは、それに応じたこれまでにない新たな空間の開発を求めてくるだろう。建築計画分野で今後も探究すべき課題はまだ残っているのではないだろうか。

参考文献

- 1) エティエンヌ・ヴェンガー 他：コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践 翔泳社,2002
- 2) ブリュノ・ラトゥール：社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門, 法政大学出版局,2019
- 3) デイヴィッド・ケリー, トム・ケリー：クリエイティブ・マインドセット 想像力・好奇心・勇気が目覚める驚異の思考法, 日経BP,2014